第１回　仏教ってなんだろう？

１ 仏教とは？　お釈迦さまの教え

「仏教」と聞いて、どのようなことをイメージしますか？

・大切な人が亡くなった時の葬儀や法事の場面
・家のお内仏（お仏壇）や先祖のお墓参り
・歴史的なお寺への観光
・数ある宗教の中のひとつ　　など

そして、なんとなく大切そうだが難しくてよくわからないもの、あるいは、自分には無関係なもの、古臭いもの、特別なもの、大事なもの、と受け止める方もあるでしょう。仏教に対する見方やとらえ方は、その方のこれまでの経験や環境により千差万別です。

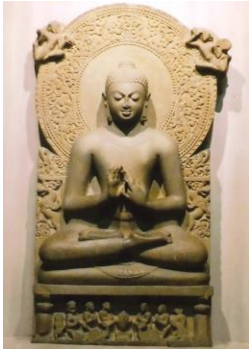
「仏教ってなんだろう？」という問いかけから、ひとつずつ一緒に考えていきたいと思います。

仏教とは何かを一言で表すならば、仏（お釈迦さま）の説かれた教えです。
仏教は、インドにお生まれになられたお釈迦さまにはじまります。

お釈迦さま（ゴータマ・シッダールタ）

紀元前5～6世紀頃（今からおよそ2500年前）インドの北部で釈迦族の王子として生まれたお釈迦さまは、29歳の時に出家し、35歳で正覚（しょうがく）（真実に目覚め）を得て、仏（仏陀（ぶっだ）＝目覚めた人、覚者（かくしゃ））と成られました。

そして、80歳で亡くなられるまで45年間にわたり、各地方をめぐり多くの人々に教えを説いてまわられました。


お釈迦さま 初転法輪像
（インド サールナート）

2 仏教の起源は？ | お釈迦さまの苦しみ悩み

お釈迦さまはなぜ出家（これまでの世俗（せぞく）の生活を捨て、道を求め歩みだすこと）されたのでしょうか？

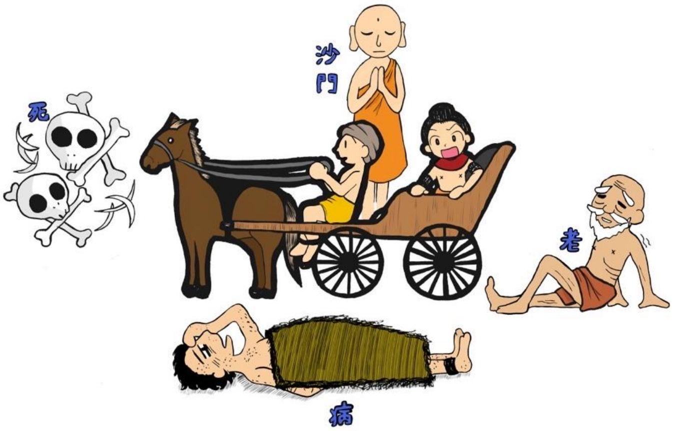
その動機はお釈迦さまの有名な逸話に表されています。

「四門出遊(しもんしゅつゆう)」の物語

お釈迦さまは、王子として生まれ、何不自由ない暮らしをおくっていました。

ある時、城外の暮らしを見たいと思った王子は、家来を連れ、東西南北の4つの門から出かけることにしました。

東の門から出かけた時には、腰は曲がり足元のおぼつかない老人に、南の門では道端に倒れている病人に出あい、西の門では葬列に遭遇しました。その姿を見た王子は驚いて、お城に戻り深く考え込んでしまいました。



「どんな人間も、老い、病み、いつかは死んでいかねばならない。
では、ここにこうして人と生まれたことの意味は何であるのか。」

最後に北門から出かけます。すると、出家した修行者に出あいました。大変質素な身なりだが凛とした穏やかな姿に心打たれた王子は、恵まれた地位と生活を捨て、出家されたのです。

お釈迦さまは、誰しもが抱える老病死の現実に直面し、日々の一時的な楽しみによって身の事実をごまかすことなく、その苦しみ悩みを自らの課題とされたのです。

Q.私たちの人生における苦しみとは、どのようなものでしょうか？

苦（四苦八苦）

仏教では人生の根本的な苦である「生・老・病・死」を四苦といい、これに加え以下の四つの苦を合わせて八苦といいます。

- 愛別離苦（あいべつりく）… 愛するものと別れる苦しみ
- 怨憎会苦（おんぞうえく）… 怨（うら）み憎んでいるものと会わなければならない苦しみ
- 求不得苦（ぐふとくく）… 求めるものが得られない苦しみ
- 五蘊盛苦（ごうんじょうく）… 五蘊（身心を形成する要素）から生じる苦しみ

3 お釈迦さまの教えは？　道理への目覚め

29歳で出家されたお釈迦さまは、6年間苦行生活をおくります。しかし、35歳の時にその苦行をやめ、菩提樹の下に座り瞑想し、正覚を得て仏陀になられます。

その正覚の内容は、この世のすべての物事は常に変化し、因（原因）と縁（条件）にしたがい、互いに関係をもって成り立っているという「縁起（因縁生起）」の道理であると言われています。

これ有るときかれ有り、これ生ずるよりかれ生ず。
これ無きときかれ無く、これ滅するよりかれ滅する。

『ウダーナ』より

お釈迦さまは、出家の動機となった老病死という苦しみの原因を「縁起」の道理によって見きわめ、人間が真実を知らないこと（無明）にその原因があることを明らかにされました。

その後、亡くなられるまで日々色々な場でお釈迦さまは教えを説かれます。教えを説かれる目の前の方に応じて説き方はさまざまでしたが、それらに通底する教えは「縁起」の道理であったとされています。

「縁起」の道理を通して、私たちは関係性の中にありながら、自己中心的な思いや都合によって、他者との間そして自分自身に問題や苦しみを生み出していることを教えられています。

Q.あなたはどのような関係の中を生きていますか？

4 私にとって仏教とは？

生きる燈（ともしび）

　お釈迦さまは、80歳で亡くなられるまで様々な地位や身分、境遇を生きる多くの人々に道理を説かれました。

　そして、お釈迦さまの説く道理を自らへの教えとして聞いた人々は、その教えに生きる仏弟子となりました。

　お釈迦さまが亡くなられた後、仏弟子たちが集まり、お釈迦さまによって教えられた教法（経）と生活規則（律）とが、集まった全員によって確認され、伝承されることになりました。

　お釈迦さまの生涯を通して表された教えは、仏弟子たちひとりひとりの迷いのあり方を照らし出し、歩むべき道を示す燈となりました。

　そして、その教えに生きられた無数の人々により、インドから中国・朝鮮半島・日本という国々と2500年という時を越えて、今ここにいる私にまで至り届いています。

　仏教の伝燈（でんとう）とは、様々な時代社会の苦悩の現実のなかで教えが生きる燈となり、人から人へと伝えられてきたものです。

　私たちにとって仏教は、高尚な理想ではなく、生活の現実に生きてはたらくものであることを、私たちに先だつ多くの方々がその歩みを通して証（あかし）しているのです。

先師の言葉

経教はこれを喩（たと）ふるに鏡のごとし　（善導大師）

仏道をならうというは、自己をならうなり　（道元禅師）

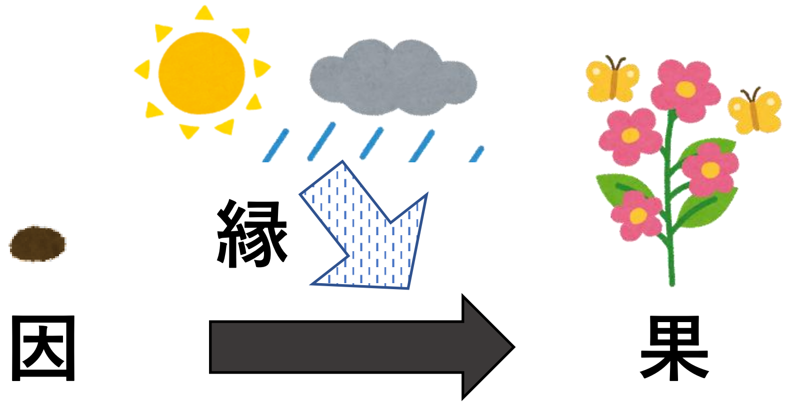
自己とは何ぞや 是れ人世の根本的問題なり　（清沢満之）

今回のキーワード

「縁起」の道理

「縁起」は「因縁生起」を略したものです。「因」は物事が生じる「原因（内部条件）」、「縁」は因にかかわる「条件（外部条件）」、そして「生起」は因と縁によって生ずる「結果（果）」を意味します。

このことを花によって例えてみましょう。花の種を植えることによって花は咲きます。この時の種が「因（原因）」となり、花が咲くことが「果（結果）」となります。しかし、種をいつどこに植えるかや天気などの「縁（条件）」によって「生起」する結果は変わります。



種を植えるという「因」が同じでも、「縁」が異なれば、花が咲いたり枯れたり、芽が出ないなど「果」は変化します。したがって、物事を固定的、決定的にとらえることはできないのです。

そして、すべての物事は「因」と「縁」との関係によって成り立ち、同時にすべての物事は必ず他の物事の「因」とも、また「縁」ともなります。上の図でいえば、植えた種が何かの「縁」となり、またお日様や雨が何かの「因」となり、そして咲いた花や枯れた花が何かの「因」や「縁」となっていく。このような関係性の成り立ちを「縁起」という道理としてお釈迦さまは説かれたのです。

普段の生活の中で、「縁起が良い、縁起が悪い」などという言葉を使ったり、耳にすることがあります。しかし、縁起という言葉は数限りのない因と縁によって私が成り立っていることを教える言葉です。

お釈迦さまは、「縁起」の道理を通して、自分自身が当たり前に握りしめている「私」とは何か？人間にとっての苦しみは、老病死という現実にあるのではなく、私たちの固く握りしめている思いにその根本の原因があるのではないか？と問いかけられています。

メモ